特集／新春特別対談

東北の底力

ねばりを発揮するのは、これからです。

東北楽天ゴールデンイーグルス 監督
星野（ほしの） 仙一（せんいち） 氏

本当の優しさ それは「勝つ」こと

一カ　球団創設9年目のリーグ優勝、そして日本一、改めておめでとうございます。監督は2001年に中日ドラゴンズの監督を退任される時の会見で、「いつも打倒ジャイアンツを目標にしていた」とおっしゃっていましたが、今回はその目標を果たしての日本一です。率直にいまの気持ちをお聞かせください。

星野　自分の人生そのものが「打倒ジャイアンツ」できましたから、実は「ひょっとしたら勝てるのではないか」と、いい意味での胸騒ぎがしていたんです。そういう意味では、日本一を競う相手がジャイアンツで良かったと思っています。

一カ　11月24日の優勝パレードには、21万4千人が集まりました。そのファンに向けてひと言、頂戴できますか。

星野　うちの選手は本当に優しいというか、私流に言うと意気地がないというか、そういう部分が強かったですし、仙台の皆さんも優しいというか、甘やかしているというか（笑）。そんな状況の中で、ようやくプロの球団としての戦い方ができるようになり、勝負に対する執念が強くなったと思います。本当の優しさというのは勝って喜んでもらうこと

球団創設9年目にして、悲願のリーグ優勝、そして日本一を達成した東北楽天ゴールデンイーグルス。

この結果を導いたのは、名将星野仙一監督の手腕によるところが大きいことは、誰もが認めるところです。

今回は、星野監督をお迎えして、選手の育成法や起用術、さらには指揮官として必要な資質などについて、楽天イーグルス・マイチーム協議会会長である鎌田仙台商工会議所会頭が対談した様子をご紹介します。地元仙台の企業経営者にとっても、学ぶべき点が多い、実りある時間となりました。

仙台商工会議所 会頭
㈱七十七銀行 会長
楽天イーグルス・マイチーム協議会 会長
鎌田（かまた） 宏（ひろし） 氏

進行
仙台商工会議所広報委員長
東北放送㈱ 代表取締役社長
一力（いちりき） 敦彦（あつひこ） 氏

だと、僕はこの3年間、選手に言い続けてきました。そして東北に日本一、仙台に日本一を選手たちがプレゼントすることができた。ここから「東北プライド」、あるいは「楽天プライド」というものを心に芽生えさせるきっかけになるのではないかと思っていますし、これからもそのような思いで選手を教育していきたいと思っています。

一力　鎌田会頭が当所会頭に就任したのが2010年の秋ということで、奇しくも星野監督が東北楽天ゴールデンイーグルスの監督に就任されたのと同じ時期だったわけですが、楽天をずっとご覧になってきたお立場から、今回の日本一についてご感想をお願いします。

鎌田　何とも言葉では表現し尽くせないほど嬉しいというのが本音です。優勝パレードで小さな子どもさんからおじいさん、おばあさんまで全ての世代が集まって祝福し、皆さん、口々に「ありがとう」とおっしゃっていました。その姿を見て私が感じたのは、皆さんは楽天を自分の子どものように、あるいは分身のように捉えているのではないかと思うのです。楽天が勝つと自分の将来も開ける。そんな思い入れがあったと思います。そういう意味では、こんなに早く9年目にしてチームを優勝に導いた星野監督の手腕は、素晴らしいと思います。

一力　今季、鎌田会頭の思い出に残った試合は、どんな試合でしたか。

「みんな幸せじゃないか、将大が負けたゲームを見られるなんて最高だぜ」と言いました。

そうは言っても、将大が負けたということで、ベンチがどんな考えを持ったか。引きずらなければいいがと思いながら、試合後、みんなを集めました。そして「よく7戦目まできた。王者ジャイアンツをここまで苦しめているのもすごいよ。でも最終戦まできたら、俺を嬉し泣きさせてくれよ。今日のことはパーッと忘れて、明日は王者に頭下げて食い下がろう」と話したのです。どうにかして選手たちの気持ちを切り替えさせようと思っての言葉に、選手から「よーし」という声が聞こえたのです。僕も「これで切り替えてくれるな」と思いました。

鎌田　たくさんありますが、その中でも日本シリーズの第6戦が衝撃的でした。田中投手が今季、初めて負ける試合を目の当たりにするというのは、強烈でした。

星野　監督は右のポケットに勝った時のコメント、左のポケットには負けた時のコメントを2つ用意しているものなのですが、あの時は左のポケットから、

勝利への執念と二人のナイスガイ

一力　星野監督は、リーグ優勝の勝因は何だったと思われますか。

星野　春先、なかなか調子が上がらず、今年はどうなるのかと思っていましたが、交流戦のスタートで横浜にラッキーな勝ち方をしたところから、ほんの少し、リズムに乗ってきたのを感じました。逆転で勝つことが多かったのは、粘りが出てきたのかなとも思いました。

僕は過去2年間、9回の攻撃を3人で終わらせてしまうことに、ものすごく怒っていたんです。一人でも塁に出て、プレッシャーをかけろと。とにかく相手を慌てさせてクローザーを引っ張り出せと。そのうちに、こちらが粘り強く食い下がってくるものだから、つい相手はセットアッパー、クローザーとつないでくるわけです。これがシーズンを通してみるとボディーブローのように効いてくるんですね。ですから「今年の楽天はすごいぞ」ということを強く印象づけることができた。それが勝因の一つではないかと思います。

鎌田　春に久米島キャンプにお邪魔した時に、草野アンバサダーが紅白試合の解説をしてくれました。そこで、いろんな話を聞きました。マギーから「いいスライダーを投げるピッチャーだ」という情報を得てバッターボックスに立ったジョーンズが、スライダーを意識していたにもかかわらず、投げ込まれたストレートに反応してヒットにしたと。その話を聞いて、「今年の外国人選手はいいな」という感想を持ちました。また草野アンバサダーのお話からは、チームに溶け込もうとしている二人の様子も伝わってきました。

星野　今までの外国人選手獲得に関しては、「安物買いの銭失い」と言わざるを得ないと僕は思っています。ですから、「人数ではなく、いい選手を呼んでください」とオーナーにうるさく言いました。そしてビッグネーム、マギーとジョーンズが来てくれたわけですが、二人ともハートがいいナイスガイです。今季の優勝は、この二人の活躍が大きいですね。それから勝利に対する執念、集中力というものを、この二人はうちの若い選手に、この一年間で染み込ませてくれたと感謝しています。

若手の起用を支えるコーチ陣の存在

一力　開幕投手に新人の則本投手を起用しました。監督は88年、99年の時も新人から起用してリーグ優勝を果たしています。選手の上手な起用法と、読者である企業経営者に対して、若手の活かし方についてお話しいただけますか。

星野　若手を使うには勇気が必要です。ある意味、開き直ると言っても良いでしょう。思い切って火の中に放り込むんです。火傷をすれば「お前の力はこんなもんだ。もう一回やり直してこい」で済むのですが、僕は運がいいのかどうか、本当にルーキーがものすごくがんばってくれる。開幕投手の則本起用は田中がWBCに行っていたので、投げ込んでおらず、調整がうまくいっていないということでしたので、どうせなら新人を生かしてやろうと思ったわけです。則本は大学時代、点は取られても三振の数がものすごく多かったんですね。三振を多く取れるピッチャーというのは何かを持っている。だから、その「何か」を伸ばしていこうということで指名したのです。

鎌田　大切な場面に若手を起用できるのは、星野監督だからこその采配だと思います。新しく監督になられた方の選手の起用を見ていますと、ベテランを使って当座をしのごうとしている意図を私は感じました。しかし、星野監督は若手をしっかり育てるのだという信念の下、信頼して起用している。これは星野監督以外にできないと思います。

星野　信頼という言葉を使われましたが、信頼はしているんです。でも信用はしていないんですよ。僕は「責めは一人で負うから、とにかく若手にやらせてみろ。そうでないとチームづくりはできない」と常々、言っています。そのための準備をコーチ陣にお願いしているわけです。僕はコーチに「こういう教育をしてくれ。それにお前たちの考えを付け加えてくれ」と言うだけです。

鎌田　銀行の支店にはキャリアも年齢層もさまざまな社員がいて、そのメンバーで仕事をして業績を上げていかなければなりません。その中でも経験の浅い人が失敗を起こしがちなのは、どの企業にも当てはまることだと思います。それを理解して、若手も戦力の一部なのだから、みんなで守って育てるということを実践していかなければならないんですね。特に中堅の社員には、新人は毎年入ってくるので目標を持って育てるようにと話しています。

一力　星野監督には、中日・阪神時代島野さんという名参謀がいらっしゃいました。そして楽天にも、監督の考えを選手に伝え、育てるコーチがいらっしゃいますね。

星野　育成の90%くらいは、コーチに任せているんです。任せる前に彼らとミーティングをして、個々の選手をどういうテーマで伸ばすか、どこを修正していくのかということをきちんと話し合います。ですから144試合、クライマックスシリーズ、日本シリーズ含めて、例えば田代コーチが組み立てた打順を私の所に持ってきても、修正したのは2、3試合です。「ちょっと待てよ」と言ったのも2、3試合。「ちょっと待てよ」という時は、私の中で不安があるわけですが、そういう時に限ってやられてしまうんです。ベンチがネガティブに考えると、ネガティブがそのまま試合結果に出てくることが本当に多いのです。だから考えを前向きに、前向きに切り替えていかなければダメですね。面白いものです。

優勝パレードの様子

独自の手法でコミュニケーション

一力　選手やフロントとは、どのようにコミュニケーションをとっているのですか。

星野　選手を特別に監督室に呼んで話をすることはほとんどありません。昨年、監督室にプレーのことで呼んだのは、嶋と慎太郎の二人くらいです。僕のコミュニケーションは、選手を捕まえて、「子ども、もう幼稚園じゃないか」とか、「嫁さんと仲良くしているか」といった他愛のない話をほんの数秒するだけです。ジョークに近い話で、コミュニケーションをとっているんですよ。注意する時も「銀次！岩手ではそんな野球をやっているのか」と。ジョークを交えて本心を伝えるのです。こんなやり方は、独特のものかもしれないですね。それでも3年目ですから、ジョークか、本音かは僕の目を見れば選手たちもわかりますよ。最初は「何をやっているんだ！」と言っただけで縮こまってました（笑）。ですから「俺のプレッシャーに負けたらマウンドでもバッターボックスでもプレッシャーには勝てないよ」という教育をずっとやってきました。

被災地の子どもたちに「強さ」をみせよう

一力　日本一を達成された時のインタビューで、星野監督は被災地の子どもたちへの想いをいの一番に口にされました。震災から3年近く経ちますが、監督に就任され、公式戦が始まる前に東日本大震災があったということで、星野監督の被災者への想いはいろいろなメディアを通して伝わってまいりました。改めてあの時の想いをお聞かせいただけますか。

星野　東日本大震災から1カ月後に仙台に戻り、若林体育館に行って子どもたちと会いました。小さい子どもたちは、はしゃいでいましたが、中学生くらいの子は深刻な表情をしていました。その時、僕は「がんばれ」とは言えなかった。だから「君らがここで耐えて、耐えて、守っていかなければいけないぞ」と強い言葉で言ったんです。その時、子どもたちが「はい！」と大きな声で返事をしてくれたんですね。その時のことを、日本シリーズの7戦が終わりかけた時にふっと思い出したんです。インタビューで「被災地の子どもたち、東北の子どもたち」と一番に言おうと。それだけは考えていました。試練とか困難というものは、それを乗り越えられる人に降りかかってくるのだと。それをはねのけてやるのだと、今でも思っています。

　それは選手にも言いました。震災後、選手たちは野球をしたくないと言ったんですよ。野球なんかできる状態じゃないと。僕は怒りました。「ふざけるな。お前ら仕事は何なんだ」と。「今、苦労している方に何を与えられるか。勝利を与える。それが俺たちの優しさじゃないのか」と。それ以外、僕らには何もできないのです。開幕の時、「お前らの優しさは良く分かったから、今度は強さを子どもたちに見せてやろう。子どもたちは強い者にあこがれるんだよ」。そう言いました。

生え抜きの選手を育て地域密着のチームに

一力　鎌田会頭、優勝パレードも無事に、そして大盛況のうちに終えることができましたが、来季の楽天に向けて、激励のメッセージをお願いします。

鎌田　何より星野監督に留任していただけるのが大変嬉しいですね。そして今度はまた新しい課題ができたのかなとも思います。それは「連覇」です。我々楽天イーグルス・マイチーム協議会も積極的にご支援してまいりたいと思います。来季は森選手や松井選手という若手が入ってきました。星野監督には若手を育て、ベテランや外国人選手とのコンビネーションをリードしていただきたいと思います。ますます期待を膨らませていますので、どうぞ、よろしくお願いします。

星野　ルーキー、しかも高校生ルーキーがすぐに活躍するとは思っていませんが、松井は三振をものすごく取るピッチャーなので、何かいいものを持っているのではないかと思います。

　早く起用したいという目で見ると、それが本人に伝わって無理が生じるので、長い目で見てあげた方がいいのかなとも思います。ゆくゆくは少なくとも7割以上が生え抜きの選手になるくらい、地域に密着していこうと考えています。ドラフト2位の内田、6位の横山が福島県出身ですし、七十七銀行の相原投手、彼も宮城の出身ですね。

　今後の課題は、1軍で活躍できるピッチャーをどう育てていくか。ピッチャー陣をどう修正していくか。そういった課題をクリアするためにクローザーや外国人の獲得を含め、編成が一生懸命やってくれています。

　少しでも油断したり、驕りがあるとそのしっぺ返しを受けます。ひたむきにやっていれば、昨シーズンのイーグルスのように結果がついてくると思います。ひたむきにやらせます。

コミュニケーションとポジティブシンキング

一力　監督が尊敬する川上監督は、9連覇を成し遂げてご勇退されたわけですが、まずは2連覇に向けて、飛翔の読者であるファンにメッセージをお願いします。

星野　読者の方は仙台の方がほとんどだと思います。皆さんが持っている東北の底力、ねばり、我慢強さというものを、うちのチームも含めて、まだまだ発揮していないのではないかと思っています。今、これからが、それらを発揮するタイミングではないでしょうか。

　昔は偉そうに言っていましたが、だんだん年を重ねてくると、ひたむきになってくるんです。コツコツやらなければならないと自分に言い聞かせています。これまでは若手を引っ張って来たのですが、今は後ろからちょっと支えてやる。コーチ陣がそのまた後ろから支えてくれているといったスタイルで1年間、また戦っていこうと思っていますし、『飛翔』の読者の皆さんもきちんとコミュニケーションをとって、自己犠牲を払い、ポジティブにものを考えていかないと生きている意味がないと僕は本当に思っています。野球とは人生そのものではないかなと。いい時は長く続かないし、悪い時は本当に自分だけがいじめられているのではないかと思います。しかし、それを乗り越えた時の喜びは、他にたとえようがありません。優勝パレードでは、沿道の皆さんがあれだけ喜んでくださいました。僕は胴上げの時よりも、パレードの時の方が涙がこぼれました。「おめでとう」と言われるより、「ありがとう」と言われた時には、ぐっとくるものがありますね。また「ありがとう」と言ってもらいたいと今、思っています。

一力　『飛翔』の11月号は、発行スケジュールの関係で、西武ドームでの星野監督胴上げの写真が表紙を飾りました。従ってビジターのユニフォーム姿の写真でしたので、来季はぜひ、ホームでの胴上げ写真を『飛翔』の表紙に使わせていただけますように期待しております。本日はどうもありがとうございました。

取材協力　ウェスティンホテル仙台